

小林・益川理論の証明<立花隆：著>を読んで。

宇宙の話、物理の話を楽しんでいる。ワクワクしながら読んでいますが相変わらず内容は解らないまでも、文科系の人々が著した最近の理科は意外と面白く夢中になる。

20世紀の物理学は理論においても方法論においても驚くほど急速な変貌を遂げ、まるで違う世界（対象世界も学術的認識世界も）の事を語っているかのような印象すら受ける。20世紀が終わる頃にはサイエンスの全てが量子論と相対論の上に乗せられるようになり、量子論と相対論なしには何も語れなくなった。一般相対論の主な場である宇宙論、天文学の領域で、一般相対論の正しさが次々証明され、現代の宇宙像は完全に一般相対論の上に立てられるようになった。ミクロの世界の物理である量子論は一口で総括できないほど多くの量子論がある。（本質はひとつとも言えるが）現代科学の最前線では、真空とは何なのか、存在とは何なのか、無とは何なのか、生成とは何なのか、消滅とは何なのか、同一性とは何なのか、といったほとんど哲学的といった方がいい概念が語られる時代になった。小林・益川理論とはそういう世界のおもしろさなのだ。

小林・益川理論そのものは、もう35年も前に京都大学にいた二人の若い研究者がある日、頭の中にパパッと閃いたユニークなアイデアをほんの数日間で論文に纏めたものである。「弱い相互作用における、CP対称性の破れ。その破れが存在するためには3世代の6つのクォークの存在が必要だ」と論じた。

それに対して実験的検証の方は世界各国に跨る延べ1000人を超えるような研究集団が何年にもわたって血の滲むような努力を積み重ねた上で実現したものである。理論と実験では投入されたエネルギー（知的、経済的、技術的）の総量に於いて比較にならないほど大きい。

著者の立花先生はこの理論を実験検証している筑波の文部省「高エネルギー加速器研究機構（KEK）」を永年ずっと取材されていたようだ。巨大科学実験装置、此处で何年もの間、何人もの科学者が研究していた内容は次回に。

少人数のチームから何十人のチームまで、何かを作る、何かに向かう、といろいろな目的に向かって一致団結いくつかの何らかの紆余曲折を何度も乗り越える作業をルポで追いかける、それを我々が読ませてもらえる、これは嬉しい限りだ。オレの周りのおっさん連中が暖かいシーズンになると野球の話、野球のチームの話に熱心だ。あれがどうした、誰が悪い、コレはいいと喧（囂・かまびす）しい。前のオリンピックで優勝した女子サッカーチームの優勝前の映像ドキュメントなんてものもあれば皆さん飛び付いて見るだろうね。一人や、二人、三人のチームの活躍よりは何十人のチームの活躍の方が絵になりやすい、話が面白い。一人の英雄伝説、勝利宣言もいいが、たくさんの人のチーム、たくさんのお話、たくさんのお笑いとお涙があつて、こちらの方が面白い。オレも浪花節だね、忠臣蔵も好きだよ。

「井戸を掘った人の事を忘れるな」の言葉のように<最初のとっかかり>を作った人、見つけた人を大事にするのがノーベル賞のような気がする。美術の世界、特に現代美術の世界では<人のしていない美術の仕事>を大事にしている。最初のとっかかりを作った人、人のしていない事をした人、みた事も無い様な事を物を表した人、こんな事を大切に世界とは本当に素晴らしい事だ。今の世の中「お金だ、市場だ」と経済活動が尊ばれすぎている。基礎基本が軽んじられ過ぎている。基礎基本が大事だと言いながらお金に走ってしまうのが今の人たちだ。

「井戸を掘った人の事を忘れるな」という言葉を最初に聞いたのは田中角栄首相が中国と国交回復した時だ。昔からあった言葉だと思っていたら、毛沢東国家主席が若い頃、井戸も無い不便な村で井戸を掘ったのを「水を飲む時は、井戸を掘った人の事を忘れるな」と石碑に記されている。と聞けば、物の謂（いわ）れやら偉大な事やらはこの程度の事かも知れない。いい事をして黙っている人、たいした事でもなく、大宣伝をする人・・・と。

飯橋輝明先生の話 3月25日亡くなった。

机の上に白い薔薇一輪が飾られている「本当に残念ですねえ、ずっとこの机に座っておられて、暗くなって帰ろうかという時にボソボソ声がすると思ったら、この机で絵を描いておられたんや、ずっと黙ってられたからわからなかった・・それぐらい熱心に描いてはった・・」と何度かアトリエで一緒になったT A Z Uちゃんが持参の一輪ざしに花を飾った。白にほんの少しくリーム色が混じった花卉が、艶やかな緑の葉の上で生き生き咲いている。彼がこんなになってしまったか、一輪の花になってしまったかと感慨深い。

「絵を習いたい、アトリエに行く」と始めたのが一年前か二年前かな。一枚・二枚か、四枚・五枚か描けばこんなに大変とは思わなかったと匙を投げるか飽きてしまうだろうと思っていた。彼はオレが住んでいる地域の小学校校長としてやって来て、周りのおっさん連中からも人気があった。ボソボソ話し太っ腹を揺らして学校を歩いていた、酒席にも歌にも同行していた。気持ちが細やかで、情感豊か、歴史が好きで博学、スポーツもできた、などなどは後からわかった知った。

彼の急逝は突然死、医者の見立ては知らないが、家族が留守の時に自宅の自室で倒れそのまま不帰の客になった。アトリエの白い薔薇一輪が飾られた傍のカレンダーに、画廊・画廊・〇〇会・彦根・画廊・信州美術館二日間とメモが残っている。最初の画廊と書かれた日はオレの展覧会の初日で「おかしいなあ、来ないなあ」と待っていたが、翌朝「飯橋が亡くなりました」と奥さんの声に茫然。そんな死に方なのでもう10日も経ったけれども、悲しいとか悼むというより「先生、何をしている、予定がいっぱい詰まっているのに、逝ったらアカンやないの・・」とけったいな不思議な感情に支配される。4月になれば先生の故郷「安来市に連れていく」「あれもしよう、これも」と予定が色々あってオレも楽しみにしていた、残念至極だ。

最後の絵

は梅の花。まさか彼が花の絵を描きだすとは、薔薇でもランでもスミレでも何でも来い「オレには花がお似合いよ」とオヤジギャグも花の絵が描けないオレには痛し痒しおもしろくもなし。冬のさ中「花が無いねえ」と待ちに待って梅の花、スケッチブックとカメラを持って花を探した。紅梅の花を描いたのが絶筆となったが、我ながらなかなかいい絵だとオレは思っている。何時も1日3時間ぐらい描いて2回で完成させていた、お茶の時に同じように描いているM I K Aさんと丁々発止笑い合っていた。最後の白梅の絵が途中で終わっているが、このまま破棄はしのびず彼の残りの3時間をオレが何とか埋めてみる、チト時間がかかりそう。

最初は60色の色鉛筆を買って「こんなに多く使えるかな」と描いていたけれども、120色3万円がバーゲン特価1万5千に飛び着いた、なんと<Faber-Castell 120色>の素晴らし色鉛筆、画学生も垂涎の的だとか、その色の多さに目を輝かせて子供のように喜んでいた。「夢中になって左手で10本ぐらい握って、右手で描いている、絵描きみたいだ」と笑っていた。

最後に奥さんの事で何度かぼやいていたのには笑ってしまったというおもしろい話を紹介しよう。去年、同じく先生をしておられる奥さんと、滝廉太郎の荒城の月で有名な岡城（大分県竹田市）に行った折、レンタルサイクル屋で電動自転車を借りて坂道を登り史跡巡りをしたとか。「重い、大汗かいて自転車で登った。ふうふう言って上に着いた、電動自転車とはなんでこんなに重い」「あんたボタン押してないのと違う」「それはよいわんかい」「ヨメサン電動自転車に乗り慣れているから涼しい顔してた」と漫才のような会話をボソボソ紹介してくれたのにはオレ大笑い。

再び、小林・益川理論の証明<立花隆：著>を読んで。

「CP対称性の破れ」とは「粒子と反粒子の間の対称性の破れ」とは「物質と反物質の間の対称性の破れ」どんな物質にもそれと電荷が反対の反物質（反粒子）がある。例えば電子（マイナス）に対する反陽電子（プラス）、陽子（プラス）に対する反陽子（マイナス）のようなものである。研究が進むにつれあらゆる粒子にそれに対応する反粒子があるということになってきた。電子、陽子だけでなくニュートリノ、クォーク、中間子というようなあらゆる粒子に反粒子がある。

我々の現実の世界はほとんどが（正）粒子でできていて、反粒子はほとんどない。ビッグバンの時代に（正）粒子も反粒子も等分に出来ていたはずなのに何故か（正）粒子だけが残り、反粒子は消えてしまった、それはなぜか。

此処まで読んで、世界は最初、物質と反物質があったが、物質だけが残って物質の世界になった、ということかな。

Bと反Bの崩壊の違い。

この世界では（正）粒子と反粒子に同じ事が同じように起こる、対称性があると考えられてきたが、本当は対称性が破れていて、それが原因で（正）粒子が生き残ったらしい。ビッグバン直後（正）粒子と反粒子が衝突しては光を残して消滅していったが、対称性が破れていた分だけ（正）粒子が生き残った、それが我々のこの世界を作ったらしい。CP対称性の破れの実例を観察する装置、それがBファクトリーによる「CP対称性の破れ」の研究なのだ。B中間子と反B中間子を作りその崩壊過程を観察すると、Bと反Bの崩壊の仕方に違いが出てくるはず、これが対称性の破れになる。

「CP対称性の破れ」という言葉を聞いた時、「破れ」という言葉に奇異な感じを受けた。破れという表現は日本語ではどこかが破れているのだと思ってしまう。多分翻訳言葉で素直な日本語なら「CPは対称ではない」「CPは非対称」だろうね。パソコンを使っているとしても最初は奇異にと感じた削除、挿入、保存といった言葉は今では普通に使っているが・・・。

自転車が必需品というような長いチューブ（リング）に電気で巨大なエネルギーを注入して粒子を発射して粒子同士を衝突させる、それを観察する。粒子という目にも見えないような小さい物を衝突させる技術、衝突を観察する目の技術、素人目にも何やら難しそうな装置での実験だけれども、小林・益川理論が検証できるまでには30年かかった。この技術を簡単に想像してみると、銃を持った二人が同じ距離だけ離れる、遠く離れた二人は元の間中点に向かって弾を放つ、中間点でカメラマンが弾の衝突を撮影する、何千何万の衝突画像を検証していく。弾自身を作り弾を込める技術、銃の力・精度を高める技術、弾丸の速度を速める装置、衝突を誘導する装置、衝突瞬間を捉える装置、画像を解析する技術、解析した資料を解決する能力、たくさんの装置を作り技術を駆使して運転しデータを集めてゆくということかな、長く図書館の本を借りて「これだけか」と先生に怒られそうだ。

この世界には陽子、電子、量子、中間子というような粒子が無数のそのまた無数にあって、なにもかもを通過して縦横無尽に飛び交っているらしい。宇宙の成り立ち、物の根源はそんな「粒子の飛び交い」らしい。粒子には（正）粒子と反粒子があるらしい。時間の問題、何物も存在しないという問題、そんなこんな条件がたくさん在って混ざって、混沌がある、混沌の世界がある、こんな世界に生きている、オレが居る、反オレが居る、考えただけでもワクワクする。

我が街にも絵の具屋がある。オレがハイティーンの頃に出来た店で、店主の奥山さんはその当時からの知り合い、4歳年上なのに髪も黒々若々しく憎たらシヤと思えども店に行くとバカ話に花が咲き仲良くしている。絵を描くものにとって絵の具は必需品なので絵の具屋も必需何かと言えば店に通った。

昔は人さまと同様習った通り、絵の具をパレットに出して筆で混色してキャンバスに塗っていたけれども、最近ではステンレスの椀に絵の具を入れて筆ならぬ刷毛で描いている。余談くワンを調べたら 椀-木地に漆などを塗った物・碗-陶磁器製の物・鉄製はどちらかな> 大阪人には馴染みの深いお好み焼きの一人前材料を混ぜる椀である。「お前、そんなもので描いているのか、ほかにいいものが無いのか、相手はアートだぞ」と怒られそうだが、もう長い間不思議にも思わずそうしている、改めて説明してみるとこの取り合わせは可笑しい限りだ。

絵を描く手法、作画態度、等と言えば大袈裟だけれども、オレにとっては日常生活なのだが、例えばここに赤い色が欲しいと仮定して、赤はどの赤にするのがいいか、赤と言ってもライトレッドとクリムソンレーキしか持っていないのだがそのどちらかを決めて椀に入れる。今回はねっとりがいいのか、それともしゃぶしゃぶがいいのかと考えながら赤い絵の具を椀の中で溶いてまずはひと筆塗っていく。その絵の具が乾ききってから次の色の事を考える。赤い色には赤い色を乗せる、被せるのがいいのかそれとも思い切って全く別な色を使ってみるかと色を決めたら、最初と同様にねっとりがいいのか、それともしゃぶしゃぶがいいのか考えて色を塗っていく。

絵の勉強を始めた時に“木箱の油絵具セット”を買ってもらった中にはお定まりの12色の絵の具が入っていた。だんだん慣れてきて使い切った絵の具の補填と、この色も必要な絵の具かとチューブを一本ずつ買うようになった。当時絵具屋の棚にはニュートン、ルフランといったヨーロッパの高価な絵の具と、ホルベイン、クサカベ、といった我々が買える値段の国産絵の具が並んでいた。「発色が違うよ、いいよ」と先生連中が軽く言っていたが、それがわかるようになったのはそれから10年も経ってからだ。「たしかに発色が違う、ヨーロッパの絵の具はいい」と生意気な事を言いニュートンの絵の具をよく使っていた。明るい色鮮やかな色はそう違いはないのだけれども、青系統の暗い色例えば<ペイニーズグレー>茶系統の暗い色例えば<バンダイクブラウンとかセピア>それらの色を白いキャンバスに乗せた時吸いつくような気持ちのいい発色が得られたと思った。

それから10年20年経ってアメリカに行った時に画家のアトリエをお邪魔する機会があって、彼の机の上にホルベイン製絵の具が散乱しているのを見て、日本の絵の具も進化したものだ感慨深かった。想像だけれどもヨーロッパでは100年も200年も同じ工房が同じ製法で同じ製品を同じ色を作っていると思っているが、日本の絵具屋さんは、よりいい製品より綺麗な色より好まれる感触と努力をするのだろうけれども、少し前まであった製品が廃番になって消えている、がらりと様変わりしているという事がある。「絵の具は、オレにとって絶対的なもの、絵の具のようなものは、変わってくれるな」と小さい声で叫んでいる。絵の具に限らず街も店も周りの日常品もどんどん変わっていくのにはいささか嫌気がさしているのだがこれか日常、今の文化文明なのかな。

奥山さんの店、彩美堂の棚に並んだ製品も少しずつ変わっているのだけれども、店主が変わらないだけでもたいしたものだ。大阪だけをとってみても画材事情、絵の具屋事情、若い頃には何十軒と有った店が、今は指折り数えるぐらいに減ってきた。梅田近辺でもたくさん有った絵の具屋も2軒3軒ぐらいが残っているのかな。

明日登る？明日登ろう！坊村から、じゃ明日朝8時出発、おお了解。

朝8時迎えに来てくれたキヌちゃんの車で滋賀県湖西の坊村に着いたのが10時、5,6時間かけて麓をぐるりと回ろうと林道を歩きだした。

歩き始めて少し登ると所々に桜の花が今を盛りに咲いている。この辺りは寒いので桜の開花が大阪より一週間遅れのようだ。GWに信州の山に行くと山桜があちこちの山肌に点在して咲いている、信州は大阪より一か月遅れになるようだが標高も1500メートルぐらいなので当然なのかも。坊村から少し入ったこの辺りの桜は色がほとんど白に近い、山桜なのか、普段目にするソメイヨシノはもう少しピンクがかっているような気がするのだが。少し進むと辛夷（コブシ）が出て来た、先ほどの桜同様真っ白だ、花が小振りに見えるがこういう種類なのだろうか。またまた信州の話だけれども雪がまだまだどっさり残る山の中に辛夷の花をよく見る、“ティシュペーパーのような花びら”と呼んでいるが、白い花弁が風に吹かれてはためき、飛んで、白い雪の上に散っている様は正にティシュペーパーに見える。ここ坊村の辛夷はティシュペーパーには見えない、小振りでなんだか堅そうだ。

キヌちゃんがコブシは“辛い”いう漢字とそれから、ええと、というのは漢方薬に辛夷という薬があって多分この辛夷の事だと思うが、ちょっと・・・、と言うので帰って調べると彼が言うとおりにこんな漢字だったのだ、先ほどから書いている漢字が正解のようだ、「辛夷の蕾が鎮静、鎮痛作用がある」と出ていた、辛夷とはモクレンの事だそうだ。ついでに車の中で彼がおもしろい花の話をしていたので披露。

「今河原で黄色い菜の花が咲いている」「あれは菜の花じゃなくて、カラシナだよ」「いやいやカラシナも菜の花だ」「??」と言う事から、そもそも“菜”とは“菜っぱ”の総称でハウレンソウでも白菜でもそれぞれの花は菜の花だ、何時も八百屋のおっさんに聞くのだけれども「菜の花の正式名称は何？何であれだけを菜の花と呼ぶの」答えが返ってきた事が無いと言っていた。たしかに菜の花は可笑しい呼び方だと思うけどもずっとそう呼び慣れているから今さら変えられないしそれでいいかと思ってしまう。

1時に夫婦滝に着き遅めの弁当、と言っても登山口で10時早速持参の手造りサンドイッチをぱくついているので、ガス欠には至っていない、ガス欠とは何の事かと言えば、いつも腹が減ったと言っているオレ、腹が減ると途端に力が無くなってしまうので山仲間から“燃費の悪い奴”の烙印を押されている、とはいうものの手造り弁当を開けるとご飯の上のカツオのフリカケ、野菜炒めが旨そうで完食した。帰りは駐車場で会おうと左右に別れた。

坊村から夫婦滝までもあまり人が入っていない道のように登ってくる間に釣り人一人に会っただけだった。谷筋の道をどんどん登ってきたが、ずるりと落ちれば危険だと思われるところが何カ所もあり、水量が少ないので助かったけれども渡渉もたくさんあり、濡れた橋やら樹木の切れ端は滑りそうだし、と谷筋の道はあまり好きではない、緊張しながら慎重に歩いてきたが、道ははっきりしているし標識も目印も所々にある。ところが一人になって進みだすと踏み跡が少ない、「ややや」と慎重に目印を探し上へ上へと登っていくと谷筋の水が枯れオトワ池に出た、右白滝山、左長池、手前夫婦滝、と書かれた標識がある。白滝山を目指して上に登るが目印を見失う、上に何かあるだろうと登り詰めた所に踏み跡があった。左右どちらかなと右に行くと白滝山頂の標識、左オトワ池、右伊藤新道、標高は1022メートルと書かれていた。

10分も行くとタラリふっくらした尾根に踏み跡も目印も無い、右に少し行ってこれではないだろうとまた進んでこっちなかと行けどもそこにも踏み跡も目印も無い、20分30分うろうろして人っ子一人いないこんな所で迷っては大変だと引返すことにした。夫婦滝に着いた時に1時間強のロスタイム、坊村に向かってひたすら歩いた。6時間のうろうろ山行、まんぞくまんぞく。

翌日伊藤新道の情報を見ると、皆さんなかなか手こずっているようで、崖のような所もあるとか、引返して正解だったと胸をなでおろしたもので、恐がりのオレには向いていない所ようです。

先日展覧会に陶芸家の石田君が来てくれたがその折の話の中で「在庫の要らない物の処分をどうしようかと思っている、調べてみると自治体の廃棄場にでっかい穴があって土物石物等はいくらでも棄てられるようになっているのでまずは安心したけれど、今すぐに棄てるのはもったいないし、いつ使うかもしれないし、というようなものが仕事場に山積みになっている・・」「作品？」「作品もあるけれども、創るための型とか、創るための材料とか、・・」その話を聞きながら友人の中西カメラマンが機材やら作品フィルムやらを棄てた話をした。「フィルムのようなペラペラのものが1トン車いっぱい分ぐらい有った」と言ったらびっくりしていた。彼は前衛陶器作家でお定まりの前衛ゆえに売れない作品と作品を創る為に作る型がどっさりあるらしいが、棄てる、もう要らないとの決心はなかなかつかない。

中西プロは若い頃大いに売れたらしいけれどもオレと知り合った頃にはバブルが弾け色々なカタカナ産業の人たちが手を挙げその渦中の一人となった、金に縁が無くなったと豪語していた。在庫のフィルム、もちろん1枚づつに包装されペラペラがちょっと厚くなった程度、それがミカン箱に満杯入り、その箱が10も20も山積みされている。映画の撮影でもできそうな電球、そのカバー、その足に使う三脚、ぐるぐる何十メートルもある太い電線、パイプ、キャスター、一人の作家の一生分の仕事道具の量はすごい。若い頃にはあれも要る、この材料も必要と今から考えれば要りもしない材料機材を買い漁るのは大なり小なり物創りみんなが同じ、それらがゴミの山となるとは、本当に若い頃には思いもしなかった話が出てくる。

いつも言っているのだけれど「立体作品は貯蔵保管に困る」趣味で作る一つや二つの作品ならいざ知らず、毎日毎年30年も40年も作っていると業務用倉庫が必要だ。オレも若い頃に枠付きキャンバスを並べて保管していたけれども3年5年と経つてくると20号や30号の枠付きキャンバスを並べただけで押入れいっぱいにはすぐになった。今は枠から剥がせる分は全部をキャンバス(布)だけにしてロールに巻いて屋根裏に積んでいる。何年かに一度は降ろして見ているが保存は完璧で上手くいっている。水彩画、デッサン、キャンバスで描いたタブローが何枚あるやらわからないけれども無数に在る相当数は在る。

3月の展覧会、最後の最後に描いた絵、完成した絵が“お気に入り”だ。(図版右端 ph by nakanisi) この絵を描くために何十年も苦勞してきたのだと嘯(うそぶ)きたい、叫びたいと言いたいが嘘(うそ)臭いかなと謙遜しつつ悦び満足している。

「この絵を買ってくれ」

「いくらだ」

「50万円」

「え！50万円、だめだ」

「だめか・・」

世間の皆様はオレに言わしたら下らん絵に50万円ぐらいスイと支払うのだけれども、オレの絵には見向きもしない、と残念である、と諦めているので、常々金には縁が無い。

絵を描きながら「今日は命日ですねえ・・・」と恭子さんがいう「え・・・?」「忘れたらアカンで～」と彼から言われそうだが飯橋先生が亡くなって一カ月、最後の梅の花を描いた絵が半分で終わっているのをそれを完成させるため時々手を入れているけれどももう少しかかりそう、とそれはそれで楽しい作業。

先日居酒屋で靖國神社の話が出た。「靖國神社に詣でるのは当然、何がいけない、国の為に死んでいった人たち・・・」とSさんがいう。「過去の戦死者に敬意を払うために参拝するのは日本人として当たり前、近隣の国々がとやかく言うのは内政干渉だ」と政治家の先生たち。ニュースで流れることぐらいしか知らないので調べてみた。

◎明治2年大村益次郎の発案のもと明治天皇の命で、戊辰戦争戦没者を祀るために創建された。以降日本国を守護するために亡くなった戦没者の慰霊追悼、顕彰するための施設及びシンボルとなった。

◎太平洋戦争終戦日“8月15日”は戦争戦没者顕彰の意味合いが強まった。

◎太平洋戦争時戦友同士で「やすくにであおう」と心のシンボルであった。

◎戦後「戦争被害を受けた、植民地被害を受けた」とする“中国”“韓国”“北朝鮮”等の国が「A級戦犯が合祀されているという理由で、日本の政治家が参拝するのに反発している。

◎靖國神社は国家の正式な公的施設ではない。そこに政治家が公人として参拝し、公費支出の寄付行為は憲法上問題がある。

◎旧日本軍が戦場として交戦した国々、植民地として支配した国々に与えた不快感に対する歴史認識。

◎日本には軍人軍属の戦死者を慰霊する正式な施設が無い。

WEBの上でも色々な論調がある。「首相が参拝するのは当然だ」「抗議する外国はなんでもかんでも抗議する」「首相と雖も私人としてなら参拝してもいい」「近隣諸国の抗議を考えたら参拝は自粛する」「公人としても私人としても参拝はしない」罵詈雑言まで含めてそれこそ色々飛び交っている。オレの考えは素直に死者を祀りたいが、死者にも区別が要るのかなと考える、弾に当たって戦場で死んだ人、病気で死んだ人、裏切者、犯罪人、死んでしまえばみんな同じ人だ死者だと思う。死者を祀る事に、本人も他人もその行為の説明も反論も要らない。靖國神社、靖國参拝という言葉から軍国主義、天皇制、近隣諸国への覇権と議論が進むのもおかしい。古山高麗雄“万年一等兵の靖国神社“に、そうだと思った。「死ねば、靖国も何もない。無です。招魂も追悼も葬式も生者の営みです。死者には何もない。霊などというものは、生者が生者のために作った観念だ」

死という現実には誰にでも来る。生があつての死だけれども、生のは誕生の時も誰もがその現実には知らないけれど、ほとんどの場合死の現実には誰でも実感できるといいながら、本当に実感できるのだろうか、というのは死の直前まで「もっと生きていたい、死ぬのは嫌だ、怖い苦しい嫌だ」という事だけが実感できてその瞬間、無への瞬間は実感できないかもしれない。他者の死に際して、悔しい残念、惜しい悲しい、そのような諸々の気持ちがたくさんあるのが、死者を祀る行為になった。その行為が昂じて世界で見られる色々な葬式へと発展した。

オレの両親の葬式も戒名代、寺への礼、葬式屋さんへの支払い、焼き場への支払い、その後何十年かの寺への支払いと金額が示すように議事義典が続いた。「オレは焼き場直送でいいよ」と家族で言っているがどうなる事やら。昨今の葬式は“寺は要らない、身内でそっとやる”というのも時々聞く。そんな考え方のオレにとって“靖國神社参拝”は不思議な光景、他の目的のある行為と映ってしまう。

ただ、昔、何も解らない青年が駆り出され、武具を持たされ、戦って死んだ怪我をしたという事を聞くに及んでは祀ってあげたい、助けてあげたいというのは普通の感情だ。ただ、だから靖國だとは言わないけれど。